

修飾語句を伴わない「第 1 文型」について

滝沢直宏

Abstract

This paper deals with the most basic construction in English, which is generally called the First Sentence Pattern in pedagogical grammar. This pattern consists of a subject and a verb only, and no other elements are required. It is, however, often pointed out in many English grammar books that this sentence pattern is usually accompanied by optional modifying words or phrases. The fact is that this pattern is indeed sometimes used, perhaps more often than generally thought, without any modifiers. This paper primarily attempts to identify which verbs are frequently used in the modifier-less First Sentence Pattern. Huge-sized corpus text data and accompanying WLP (word/lemma/pos) files are utilized for this purpose.

キーワード：第 1 文型, 「単独 SV 構文」, iWeb Corpus (Full Text), 動詞, 構文

1. はじめに

学習英文法の観点から見る限り, 英語の基本文型はいわゆる「5 文型」である。英語の文を「5 文型」に分類することについては様々な問題点が既に指摘されており, Quirk *et al.* (1985) は 7 文型を提示しているし, 8 文型の提案もある (安藤 (1983, 2008))。しかし, 「5 文型」が現在においても学習英文法における基本文型であるという事実は動かない¹⁾。

本稿は, いわゆる「5 文型」の問題点を指摘するのでも, 新たな分類法を提案するのでもなく, 「5 文型」の中の「第 1 文型」についてまだ扱われていないと思われる問題を取り上げる。「第 1 文型」は, 言うまでもなく S+V で構成されている文型である。しかし, この文型が S+V のみで使われることはあまりないのではないかという印象は, 筆者のみならず, 一般的に抱かれ, また指摘されている。例えば, *These birds sing sweetly.* (安井 (1996: 15)) や *Birds abound in the area.* (W4) のように, 副詞 (*sweetly*) や前置詞句 (*in the area*) などの文型判定に関わらない随意的要素の共起が普通ということである。実際, 高校段階で使われている学習英文法の参考書を見ると, 『総合英語 Forest』(第 7 版) は「主語と動詞だけで意味を表すことは少なく, ……主語や動詞以外の情報を加えることが多い。」(p. 38) とし, 『新エスト総合英語』(四訂版) は「……S と V だけの文はあまりなく, M をともなうのがふつうである。」(p. 38) と指摘している。こ

こでの M は「修飾語」のことであるが、語ではなく句になることもあるので、以降、「修飾語句」と表記し、区別なく扱う。『ジーニアス総合英語』は、以下に引く例文 (1) (2) を挙げ、「実際の英語では (1) のような <SV> だけの文は非常に少なく、(2) のように修飾語句がつく方が圧倒的に多い。」(p. 48) としている。

- (1) The game ended.
- (2) She stayed in London.

上記のような記述がある一方で、では一体、どのような動詞が、またどのような場合に、修飾語句を伴わず S+V のみの第 1 文型が使われるのかに関する記述は、筆者の知る限り、なされていない。そこで、本稿では、(1) のような随意的な要素を全て削ぎ落とした第 1 文型を対象とする。この試みは、修飾語句がなくても意味伝達に十分な働きをする動詞または構文とは何かの認定を行うことを最終的な目的としている。とはいえ、構文については、等位接続詞および従属接続詞に関わる事例に限定し、その中で状況を観察するに留めざるをえない。対象としている構文の自動的抽出は不可能だからである。なお、本稿では、今後、随意的な要素を全て削ぎ落とした第 1 文型を「単独 SV 構文」と呼ぶこととする。

滝沢 (2020) でも述べた通り、語彙と文法は、二分法的に考えられがちであるが、言語の使用実態を見ると、両者を完全に二分することは適切ではない。語彙と文法が密接な関連性をもつものとして捉える語彙文法的言語観 (lexico-grammar 的な言語観 (Sinclair (1991), Hunston and Francis (2000), Partington (1998), Tognini-Bonelli (2001) などを参照) は、適切な言語記述の観点から重要なだけでなく、学習者が自然な言語表現を実現する上において重要であり、学習英文法の観点からも注目に値する。本稿は、「単独 SV 構文」を語彙文法的言語観から見直す試みと位置付けられる。

2. 「単独 SV 構文」の実例と辞書などにおける記述

まず、「単独 SV 構文」の例をいくつか挙げる。いずれも筆者が気づいた例である。以下、下線は筆者による。

- (3) Posters and banners abound. (*The Daily Yomiuri*, 2009/6/23, p. 15)
- (4) But large gaps remained. (*The Daily Yomiuri*, 2009/12/19, p. 1) ²⁾
- (5) The answers of course vary, but there are certain trends to the responses among those who have newly arrived. (*The Japan News*, 2016/5/5, p. 8)

ここで使われている *abound*, *remain*, *vary* という動詞は、比較的「単独 SV 構文」に使われやすいという印象を筆者はもっている。そこで、G5, O2, W4 という 3 点の学習英和辞典と LDOCE6 と OALD10 という 2 点の英英辞書 (および WWW サイト: LDOCE_WWW と OLD_WWW) でこれら 3 動詞について、「単独 SV 構文」の例文が掲載されているかを確認する。

- (6) Rumors about UFOs abound. (O2)
- (7) Tales of illegal business dealings abounded. (LDOCE_WWW)
- (8) But theories – often conflicting – abound. (LDOCE_WWW)
- (9) Even in the face of all the pain and confusion, however, opportunities abound. (LDOCE_WWW)
- (10) Most people still live in the hinterlands of the inhabited islands eking out a living, but poverty abounds. (LDOCE_WWW)
- (11) Stories about his travels abound. (OALD10)

- (12) Little of the original building remains. (LDOCE6)
- (13) Only about half of the original workforce remains. (OLD_WWW)

- (14) The weather varies (from hour to hour). (G5)
- (15) “What time do you usually go to bed?” “It varies.” (W4)

まず、abound について見ると、3点の英和辞典の中では O2 にのみ掲載されているが、英英辞典の WWW サイトには、多くの例がある。そして、OALD10 においては、「単独 SV 構文」の例のみが挙がっている (例文 (11))。remain については、いずれの英和辞書にも「単独 SV 構文」の例文はないが、英英辞典には掲載されている。vary については、上では 2 例のみ挙げているが、WWW 版まで含めると、確認した全ての辞書が揃って「単独 SV 構文」の例を掲載している。vary では It varies. という主語まで固定した定型表現としてどの辞書も取り上げていて、G5 のみが、普通名詞を主要部とする名詞句を主語とする「単独 SV 構文」の例を掲載している。

次に他動詞 kill の例を見る。(16) は、喫煙の健康被害について述べた有名な表現である (豊田 (2019: 166-167) 参照) が、通常は他動詞で使われる kill が「単独 SV 構文」に生じている。

- (16) Smoking kills.

他にも、以下のように主語を入れ替えただけの動詞 kill の文は多数存在する。以下、例文は iWeb から引く。

- (17) Speed kills.
- (18) Stress kills.
- (19) Greed kills.

これら (16)-(19) のような種類の文においては、主語の名詞句には人を kill する一般的性質があるということであるから、現在時制で使われることが専らである (iWeb Corpus を見ると、「単独 SV 構文」で主語が 1 語あるいは 2 語の名詞句からなる kill の例は、kill が 38 例、kills が 96 例で、killed は皆無である)。なお、意味の上では目的語に相当するものが存在しながら、形の

上では明示されず、自動詞のように振る舞う現象については、西脇(2011, 2019)を参照。

このように「単独SV構文」は実際に存在するし、辞書や文献において、散発的には掲載・指摘されている。しかし、どの動詞が「単独SV構文」で使えるかについての情報を体系的に得ることは難しい。

これまで述べてきた種類は動詞に注目がいくが、それとは異なり、構文的な理由で「単独SV構文」で使われている事例もある。例えば、以下の例が該当する。

(20) Opposites attract and likes repel.

(21) Teachers teach and students learn.

(22) Man proposes but god disposes.

(20)-(22)の動詞は、どちらも他動詞としての用法が通常であるが、and や but を挟んで対立的に使われ、文は「単独SV構文」になっている。この型は(16)-(19)と同様、行為や性質に着目されるので、通常、自動詞でなく他動詞で用いられる動詞でさえも、「単独SV構文」に出現すると言える。これらの例は、動詞自体の性格というよりも、「文and/but文。」というパターンゆえの用法であると考えられる。

3. 大規模コーパスの利用

本稿で取り上げる問題に限ったことではないが、言語使用の実態を探るにはコーパスの活用が不可欠である。扱う問題によって必要とされる規模は同じではなく、高頻度の語句の振る舞いを見るには、1億語(書籍換算でおよそ1,000冊)程度のコーパスで十分なことも多いが、周辺的な構文的・語彙的言語現象を捉えようとする、可能な限り大規模なコーパスの利用が必要となる。現在では、140億語(書籍換算でおよそ14万冊)を有するiWeb Corpusがその要件を満たす唯一のコーパスであると考えられる。本稿で取り上げる問題の場合はどうかという、SV構文自体は高頻度であるものの、「単独SV構文」となると比較的稀な部類に入る上、「単独SV構文」に典型的に生じる動詞を認定しようとする、全体の中の割合を見る作業が必要になり、その割合を可能な限り明瞭に示すためには、規模は周辺的な言語現象の場合と同様に大規模であることが求められると判断される。そこで、本稿においては、iWeb Corpusを用いることとするが、Webインターフェイスではなく、自由自在な処理が可能なFull Text版を用いる。以後、本稿でいうiWebとは、iWeb CorpusのFull Text版のことである。

本稿では、iWebのうちWLPファイルを活用する。WLPファイルには、word, lemma, posの情報が与えられている。wordは実際に使われている語で、大文字・小文字は区別されている。lemmaは、wordの辞書形であり、常に小文字で与えられている。posはpart of speechのことであり、Claws7の品詞情報が用いられている³⁾。品詞情報(pos)は、機械的に付与されるので、誤りも多く含まれている(滝沢(2016)参照)ので、筆者は、やむをえない場合を除き、依拠しないという立場をとっている。しかし、本稿の問題を扱うには、文末に現れる「動詞」とその主語を構成する「普通名詞」に言及する必要があるため、品詞情報に依拠せざるをえない。

WLP ファイルの例として Stress kills. の箇所を部分的に示すと、次のようになっている。

(23)

Stress	stress	NN1
kills	kill	VVZ
.	.	.

左端は word, 中央は lemma, 右端は pos である。NN1 は普通名詞の単数形, VVZ は一般動詞の三単現を意味する pos である。ピリオドはピリオドのまま lemma と pos が与えられている。これをもとにして, 文末に普通名詞 + 動詞が生じている例が抽出できることになる。そして, この環境に生じている一般動詞の頻度と, 一般動詞単独の頻度を出し, 後者を分母, 前者を分子にすれば, 割合を求めることができ, 「単独 SV 構文」に特有の動詞を見つけ出すことができる。

抽出の都合上, 縦並びのデータを横並びに整形する (3つのフィールドは _ で結合し, 各行の区切り文字は改行ではなく半角スペースとする)。したがって, (23) は, 以下のようになる。なお, 本稿の目的のため, ピリオドの直後に改行コード (\n) を挿入している。

(24) Stress_stress_NN1 kills_kill_VVZ ._. .

また, 主語が2語の場合の例としては, (25) のようなものがあるが, これも同様に (26) のように整形される。

(25)

(先行部分は省略)		
the	the	AT
evidence	evidence	NN1
abounds	abound	VVZ
.	.	.

(26) the_the_AT evidence_evidence_NN1 abounds_abound_VVZ ._. .

以上のように iWeb の WLP ファイル全体を整形することで, 「単独 SV 構文」を扱うための基礎資料が得られたことになる。

4. 「単独 SV 構文」に生じる動詞の認定

本節では, (24) や (26) のように整形されたデータからの情報抽出を行う。

4.1. N + V. タイプ

まずは、(27) の正規表現を用いた処理を行う。この正規表現を見れば分かる通り、動詞は現在形 (VV0), 三人称単数形 (VVZ), 過去形 (VVD) に限定している。(進行形は本稿では扱わず、別扱いとする。)

(27) `^[A-Z][a-z]+_[a-z]+_NN[12] [a-z]+_[a-z]+_VV[0ZD] ._.$.`

ここでは前半の `^[A-Z][a-z]+_[a-z]+_NN[12]` で、行頭が大文字で始まる普通名詞の直後に動詞(現在形, 三人称単数形, 過去形)が現れているという環境を指定している。前述の通り、ピリオドで改行コードが挿入されているので、「単独SV構文」があれば、それだけで1行を成す形式になっているはずである。このような指定をすることで、修飾語句が主語名詞に付いている例はここでは無視される(次節で別に扱う)ものの、「単独SV構文」ではない非該当例が大量に混在することを避けている。限定をきつくすることによって、非該当例の混入を防いでいるわけである。この正規表現にマッチする文字列には、以下のような例が含まれる(lemma と pos は省き、文形式で示す。以下、同様)。

(28) Stress kills.

iWeb においてこの環境に現れる動詞 (word ではなく lemma) の頻度を出し、それを降順に示すと以下ようになる。() 内の数値は頻度である。頻度 50 以上を示す。中には、Buyer beware. の beware や Best/Kind regards. の regard のように容易に非該当例と判別できる語も混在するが、ほとんどが該当例である。

(29) apply (1603), happen (1253), vary (538), beware (476), ensue (336), abound (330), regard (259), continue (217), follow (217), die (129), disagree (126), suck (118), exist (108), sell (107), kill (97), grow (94), hurt (94), open (91), disappear (80), fail (79), reign (77), begin (74), occur (69), agree (68), appear (68), remain (68), evolve (62), include (62), come (58), differ (58), say (56), await (54), pay (51), lie (50), start (50)

これらの中には、kill のように基本的に他動詞として使われる動詞が含まれていることは、注目に値する。

これらの語に lemma (pos が VV0, VVZ, VVD に限定) の頻度を埋め込み、その千分率を降順に見て、値が 1 を超えているものを示す。明らかな非該当例は除く。

修飾語句を伴わない「第1文型」について（滝沢）

表1：N + V. タイプに出現する動詞（千分率の降順）

動詞	この構文での頻度	lemma 頻度	千分率
ensue	336	21,327	15.75
abound	330	45,581	7.24
vary	538	421,828	1.28
apply	1603	1,299,143	1.23

名詞1語で主語名詞句を形成しているという極めて限定された環境であるので割合は低いものの、「単独SV構文」で使われる動詞の抽出はできている。以下、iWebから典型例を引く。

- (30) Chaos ensues.
- (31) Examples abound.
- (32) Prices vary.
- (33) Restrictions apply.

4.2. X + N + V. タイプ

次に主語が普通名詞1語ではなく、別の1語が先行する例を見てみよう。先行する別の1語は、修飾語句を意図しているが、接続詞や文にかかる副詞などが来る場合もある。品詞の指定をしないのは、修飾語句に関して特定の品詞に決めることが難しいからである。用いる正規表現は以下である。

- (34) `^[A-Z][a-z]+_S+ [a-z]+_[a-z]+_NN[12] [a-z]+_[a-z]+_VV[0ZD] ._.$.`

この環境に現れる動詞（wordではなくlemma）の頻度を出し、それを降順に示すと以下のようになる。数値は頻度である。頻度50以上を示す。

- (35) apply (4428), continue (1201), ask (1098), happen (871), vary (757), die (592), follow (545), open (432), exist (409), remain (397), begin (363), abound (322), disappear (281), hurt (265), grow (239), come (229), survive (224), agree (204), suck (199), disagree (198), appear (198), close (193), include (188), laugh (176), sink (171), occur (169), fail (163), ensue (148), start (137), know (128), await (128), explode (123), stink (120), break (107), beware (106), ring (103), meet (102), persist (97), boggle (88), arrive (88), fall (87), vanish (85), arise (85), soar (81), fade (79), go (77), prevail (71), emerge (71), say (68), press (68), speak (67), plummet (66), suffer (65), shake (65), differ (65), thicken (61), ache (58), nod (57), widen (53), last (53)

これらの語にlemma（posがVV0, VVZ, VVDに限定）の頻度を埋め込み、その千分率を降順に見て、値が1を超えているものを示す。

表2: X + N + V. タイプに出現する動詞 (千分率の降順)

動詞	この構文での頻度	lemma 頻度	千分率
abound	322	45,581	7.06
ensue	148	21,327	6.94
stink	120	22,654	5.30
apply	4,428	1,299,143	3.41
sink	171	57,462	2.98
hurt	265	127,803	2.07
explode	123	62,987	1.95
vary	757	421,828	1.79
disappear	281	174,191	1.61
await	128	90,716	1.41
disagree	198	150,389	1.32
survive	224	190,628	1.18
ring	103	91,222	1.13

以下、具体的な例文を示す。

- (36) The possibilities abound.
- (37) General confusion ensues.
- (38) Those guys stink.
- (39) Some restrictions apply.
- (40) My heart sank.
- (41) My head hurts.
- (42) The place exploded.
- (43) Award amounts vary.
- (44) The image disappears.
- (45) The world awaits.
- (46) The court disagreed.
- (47) The man survived.
- (48) The phone rang.

以上、「単独SV構文」に現れやすい動詞を同定した。これらの動詞は、構文の影響なく単独で使われているので、語彙的性格によるものに類別できる。前半で取り上げた NP kills. では、kill は通常他動詞で使われることが圧倒的に多いので、割合ではかなり低位になるものの (29) のリストから明らかなように、N+V. のパターンにおいては、かなり上位に来ている。一方、(35) のリストに kill が存在していないことは、この動詞の「単独SV構文」での用法が、単一語の主語を取りやすいことを意味している。

5. 構文的性質による「単独SV構文」

次に語彙的性質ではなく、構文的性質によって生じる「単独SV構文」を取り上げる。しかし、「単独SV構文」と相性の良い構文が予め決まっているわけではないので、ここでは「文 and/but 文 .」と「従属接続詞 文, 文 .」に限定してその使用実態を観察するに留める。

5.1. 「文 and/but 文 .」タイプ

まずは前述した「文 and/but 文 .」（(20)-(22)型）を取り上げる。用いる正規表現は以下である。

(49) $^{[A-Z][a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{NN}[12][a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{VV}[0ZD] (, ,) ? (and|but) _S+ [a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{NN}[12][a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{VV}[0ZD] . , .}$

例を示すと以下のようなになる。

- (50) Tyrants ascend and terrors threaten.
- (51) Disease diminishes and life lengthens.
- (52) Opinions vary, but reality persists.
- (53) Reasoning ceases, but knowledge remains.

主語名詞に別の1語（修飾語句など）が付く例を探す正規表現は、以下である。

(54) $^{[A-Z][a-z]_{+}[_{S+} [a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{NN}[12][a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{VV}[0ZD] (, ,) ? (and|but) _S+ [a-z]_{+}[_{S+} [a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{NN}[12][a-z]_{+}[a-z]_{+}[_{VV}[0ZD] . , . \$}$

例文を示す。

- (55) Opposite charges attract and like charges repel.
- (56) The elevator arrives and the doors open.
- (57) The eye sees, but the mind evaluates.
- (58) The body knows, but the head interferes.

5.2. 「従属接続詞 文, 文 .」タイプ

構文的なものとしては、従属接続詞が関わる場合もある。「従属接続詞 文, 文 .」である。従属接続詞にはCSというposが与えられているので、以下の正規表現を用いて、その使用実態を探る。ここでは、主語の普通名詞（NN[12]）の前には0語から3語の任意の語が生じている環境を指定している。

(59) $^{[A-Z][a-z]+}_{[a-z]+}_{CS} ([a-z]+_{\S+}) \{0,3\} [a-z]+_{[a-z]+}_{NN[12]} [a-z]+_{[a-z]+}_{VV[0ZD]}$
 $_{,_,} ([a-z]+_{\S+}) \{0,3\} [a-z]+_{[a-z]+}_{NN[12]} [a-z]+_{[a-z]+}_{VV[0ZD]} _._.\$$

例文を示す。

- (60) When the rocks break, the earthquake occurs.
 (61) Where our similarities end, extreme features begin.
 (62) If the cell body dies, the neuron dies.
 (63) Though details change, the principles endure.
 (64) Although their companies succeed, investors lose.
 (65) Until the first symptom appears, the body compensates.
 (66) Unless stimulation continues, the resolution stage occurs.

上記の環境に現れる従属接続詞とその頻度は、以下の通りである。頻度 10 以上を示す。

(67) If (96), When (96), Where (16), While (13)

これらの従属接続詞の単独頻度（大文字で始まる場合に限定）を埋め込んで、その百万分率を降順に示すと以下の通りとなる。

表 3 : CS NP V, S V. に現れる従属接続詞（百万分率の降順）

接続詞	この環境での頻度	大文字で始まる頻度	百万分率
Where	16	306,553	5.22
When	96	6,384,658	1.50
If	96	17,377,482	0.55
While	13	2,956,275	0.44

この処理により、「単独 SV 構文」に生じやすい従属接続詞を同定した。

6. まとめ

本稿は、最も基本的な文型であるいわゆる「第 1 文型」から修飾語句を全て取り払った「単独 SV 構文」を取り上げた。第 4 節において、「単独 SV 構文」と相性の良い動詞の認定を行い、第 5 節において、「文 and/but 文 .」と「従属接続詞 文, 文 .」型に限定してその使用実態を観察した。そして、どのような従属接続詞がこの構文に生じやすいかを見た。

注

- * 本稿執筆に際し、高校での英語教育歴の長い西脇幸太氏から有益なコメントを頂戴した。記して、謝意を表す。言うまでもなく、本稿における不備はすべて筆者の責任による。

- 1) 「5文型」の由来については、宮脇(2012)や川嶋(2015)が詳しい。また、宮脇(2012)に言及している渡部(2012)も参照。安井(1996: 15-16)は、「5文型」の問題点のみならず、有用性にも言及している。
- 2) この文には But があるが、本稿では、文頭・節頭の等位接続詞は「単独SV構文」か否かの判断に影響しないものとして扱う。
- 3) <http://ucrel.lancs.ac.uk/claws7tags.html> 参照

参考文献

- 安藤貞雄. 1983. 『英語教師の文法研究』大修館書店.
- _____. 2008. 『英語の文型－文型がわかれば、英語がわかる』開拓社.
- Hunston, S. and G. Francis. 2000. *Pattern Grammar: A Corpus-Driven Approach to the Lexical Grammar of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- 川嶋正士. 2015. 『5文型』論考 Parallel Grammar Series, Part II の検証』朝日出版社.
- 宮脇正孝. 2012. 「5文型の源流を辿る: C. T. Onions, *An Advanced English Syntax* (1904) を超えて」『専修人文論集』90: 437-465. [<https://irdb.nii.ac.jp/01004/0004355556>]
- 西脇幸太. 2011. 「動詞 Eat の Missing Object – 中核的な解釈と周辺的な解釈 –」『英語語法文法研究』18: 110-125.
- _____. 2019. 「他動詞 eat の目的語省略」現代英語談話会(編)『英語のエッセンス』pp. 51-61. 大阪教育図書.
- Partington, A. 1998. *Patterns and Meanings: Using Corpora for English Language Research and Teaching*. Amsterdam: John Benjamins.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sinclair, J. 1991. *Corpus, Concordance, Collocations*, Oxford: Oxford University Press.
- 滝沢直宏. 2016. 「コーパスからの情報抽出と抽出データの意味づけに関わる諸問題」『英語コーパス研究』23: 45-60.
- _____. 2020. 「周辺的な接続詞 lest について: 語彙文法的視点からの記述」『立命館言語文化研究』立命館大学国際言語文化研究所. 32,2: 13-27.
- Tognini-Bonelli, E. 2001. *Corpus Linguistics at Work*. Amsterdam: John Benjamins.
- 豊田昌倫. 2019. 「英語の音を読む」現代英語談話会(編)『英語のエッセンス』pp. 165-175. 大阪教育図書.
- 渡部昇一. 2012. 「英語の5文型の起源」(「アングロ・サクソン文明落穂集」475)『英語教育』61,5: 57.
- 安井稔. 1996. 『英文法総覧 改訂版』開拓社.

辞書とその略記

- 井上永幸・赤野一郎(編). 2019. 『ウィズダム英和辞典 第4版』東京: 三省堂. [W4 と略記]
- 南出康世(編). 2014. 『ジーニアス英和辞典 第5版』東京: 大修館書店. [G5 と略記]
- 野村恵造・花本金吾・林龍次郎(編). 2013. 『オーレックス英和辞典 第3版』東京: 旺文社. [O2 と略記]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. 2014. Harlow: Pearson Education. [LDOCE6 と略記]
- Longman Dictionary of Contemporary English Online [<https://www.ldoceonline.com>] アクセス 2021年7月26日 [LDOCE_WWW と略記]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 10th ed. 2020. Oxford: Oxford University Press. [OALD10 と略記]
- Oxford Learner's Dictionaries の WWW サイト [<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com>] アクセス 2021年7月26日 [OLD_WWW と略記]

学習参考書

- 石黒昭博（監修）. 2017. 『総合英語 Forest』 第7版. 東京：桐原書店.
釜池進（監修）・戸板洋市（編著）. 2014. 『新エスト総合英語』 四訂版. 京都：エスト出版.
中邑光男・山岡賢史・柏野健次（編）. 2017. 『ジーニアス総合英語』 東京：大修館書店.

コーパスとその略記

iWeb Corpus の Full Text. [iWeb と略記]